『大阿弥陀経』訳注（五）

辛　嶋　静　志

はじめに

今回訳出したのは，大正蔵第12巻，307a4～309c18の部分だが，その内容は多岐にわたり，『大阿弥陀経』の成立史を考察する上で，もっとも問題になる部分を含む。

まず，釈尊は阿難を対告者として，阿弥陀仏国の菩薩・阿羅漢の食事について，いかに自由自在ですばらしいかを述べる（第十四願の成就文である）。

次に，阿弥陀仏が説法するときには，神々が，仏と菩薩・阿羅漢たちを供養し，さらに八方上下の他方仏国の菩薩たちが，阿弥陀の説法を聴聞に来ることを述べ，続いて阿弥陀仏国の菩薩・阿羅漢がいかに優れているかを述べる。

その後，突然，阿逸菩薩が立ち上がって，阿弥陀仏国の阿羅漢の中には般涅槃する者がいるかどうか，釈尊に尋ねる。ここから釈尊は阿逸菩薩を対告者として阿弥陀仏国の特徴を述べる。

無数の阿羅漢が入滅して去る一方，無数の者が新たに阿弥陀仏国に生まれて来るので，阿弥陀仏国に住む者の数は，大海の水の様に増減はないという。また，阿弥陀仏国の菩薩・阿羅漢には，住居を自在にすることの出来る者と出来ない者とがいるが，これは前世に積んだ功徳の違いによるという。

ついで，阿弥陀仏国の菩薩・阿羅漢はみな頭頂から光明を放っているが，とくに阿弥陀仏の脇侍である盧楼亘（観音）・摩訶那鉢（大勢至）の両菩薩の光明は優れていることを説く。そして，危機に遭遇してもこれら菩薩に帰命すれば免れると説く。これは，『法華経』が観音信仰を取り入れて『普門品』を加えたのと同様，当時流行していた観音信仰を取り入れた記述であろう。

さらに，阿弥陀仏の光明が無限であり，永遠に輝くといい，その理由として阿弥陀仏の寿命の永いことを説く。光明・寿命の無限さに続いて，教えを受ける者の数また恩徳・教え・経巻の無限さを説いている。続いて，阿弥陀仏の寿命の永遠さを再説する（第二十願の成就文である）。そして，阿弥陀仏が入滅した後は，前述の両菩薩が

順次仏になり，阿弥陀仏の法を継承していくという。

この後，阿難が仏に「須弥山のない阿弥陀仏国では，四天王天と三十三天は何に支えられているのですか」と尋ねる。これに対して仏は「君は仏（わたし）に疑念を持つのか」といい，続けて仏（釈尊）の智慧がいかに極まりないかを詳しく説く。そして，結局，阿難の質問への答えとして，この世界で，天界の下から三番目の焔天以上の諸天が空中に浮かんでいるのと同様に，阿弥陀仏国ではその仏の威神力によって四天王天，忉利天も空中に浮かんでいるという。最後に，阿難が仏の智慧と威神力を讃えて本経の上巻が終わる。

このように，仏の対告者が，阿難から阿逸菩薩へ，そして再び阿難へと変わっている。しかも，阿逸菩薩を対告者にして説く部分には，阿弥陀仏国の阿羅漢や阿弥陀仏自身の入滅を説くこと，阿弥陀仏の後継者として観音・大勢至の作仏を説くことなど，他の諸本に見られない記述が現れる。そのことから，藤田宏達・末木文美士氏などは，これら阿逸を対告者にした部分は，付随的で他の部分に比べて成立が遅いのではないかと考えている（藤田 1970: 173f; 末木 1980: 257f.; 藤田 1994: 44f.; cf. 香川 1993: 290f.）。末木氏は，その部分に続く阿弥陀仏国の四天王天，忉利天に関する問答も後の付加と考えている（末木 1980: 258）。これらの部分には他の部分とは異質な部分が認められるのは確かだが，果たして他の部分に比べて成立が遅いかどうかは即断できない。本来多様雑多な内容を盛り込んだ経典が，時代が下がるにつれて，より論理的整合性をもった経典に整理改変された可能性もあるからである。

底本には高麗蔵所収本を用い，『中華大蔵経』第 9 巻所収の金蔵広勝寺本などを参照にした。なお，訳の部分は，1995 年から 1997 年春まで真宗教学研究所で行われた『大阿弥陀経』研究会で，竹橋太氏が準備した訳を参考にした。

和訳

（大正蔵第 12 巻，307a4 ～ 309c18）

[1] 仏は仰った。

「阿弥陀仏や菩薩・阿羅漢たちが食事をしたいと思うと，自然の七宝で出来た机と木綿[2]の敷物[3]が（現れ）座席となる。

---

1) 以下の部分，諸本との対照は，香川 1984: 218 ～ 219 を参照。本経と『平等覚経』以外はとても簡潔。ここと 303c5 ～ 8 とは本経の第十四願が成就した様を描いている。訳注（二）注（59）を参照。

仏と菩薩が皆坐ると，それぞれの前に自然の七宝の鉢が現れる。（鉢の）中には百味の食べ物・飲み物がある。（その）食べ物・飲み物は，この世の物とも異なるし，天上の物でもない。これら百味の食べ物・飲み物は，[4] 八方上下（の世界）のあらゆる自然の食べ物・飲み物の中で最高の味をもち，比べようのないほどとても香しく美味しいものが，自然に生じたものなのである。甘いものでも酸っぱいものでも思いのままに得られる[5]。

[6] 菩薩・阿羅漢たちの中には，金の鉢が欲しい者もいるし，銀の鉢が欲しい者もいるし，水晶の鉢が欲しい者もいるし，珊瑚の鉢が欲しい者もいるし，琥珀の鉢が欲しい者もいるし，白玉の鉢が欲しい者もいるし，車渠の鉢が欲しい者もいるし，瑪瑙の鉢が欲しい者もいるし，明月珠の鉢が欲しい者もいるし，摩尼珠の鉢が欲しい者もいるし，紫磨金[7] の鉢が欲しい者もいるが，それぞれの思いのままにすぐさま現れる。それらはどこからか（持って）来るのでもなく，誰かが供養するのでもない。自然にすっと現れるのである。

菩薩・阿羅漢たちはみな食事をする。その食事は多からず，少なからず，全く平等である。（彼らは食事の）善し悪しを言わないし，美味しいからといって喜んだりはしない。食べ終われば，食事の道具・鉢・机・座席はみなすっと消え去り，食べたくなると，またすっと現れる。

[8] 菩薩・阿羅漢たちはみな心が清らかで，飲食物も（本当に食べる訳でなく）ただ

2）**劫波育**　「劫波育」は Skt. *kārpāsika*（木綿の布）に対応する音写語。訳注（四）注（17）を参照。

3）**罽曇**　三本と『平等覚経』(287a26) には「罽氎」とある。いずれも辞書類に採られていない。なお，『平等覚経』には「自然劫波育，自然罽氎」とあり，「劫波育」と「罽氎」とを分けて解釈している。この部分梵本・『無量寿経』などに対応なし。

4）**八方上下衆自然飲食中精味，甚香美無比，自然化生耳**　訳注（二）注（51）を参照。

5）**在所欲得**　古訳仏典には「在」が「随」の意味で使われる例が多い。ここでは「在所欲～」で「在心所～」（訳注［一］注［55］），「在意所～」（訳注［四］注［21］）と同じく，「自在に～する」の意味。訳注（二）注（23），（三）注（65），（五）注（63），Krsh (2001). 353 も参照。

6）以下の鉢に関する部分，本経と『平等覚経』及び『無量寿経』以外にはない（香川 1984: 218 ～ 219 を参照）。律典に依れば，釈尊は鉄製と陶器製の鉢のみを許し，金・銀・宝石・石・木製の鉢を禁止した（Vinayapiṭaka II 112.18f.;『五分律』大正蔵第 22 巻，169c25f.;『摩訶僧祇律』461b ～ 462a;『四分律』952c;『十誦律』大正蔵第 23 巻，269b6f.;『根本説一切有部毘奈耶雑事』大正蔵第 24 巻，213c23f., 325b12f.;『毘尼母経』809c26, 847b24f.）。

7）**紫磨金**　訳注（一）注（81）を参照。

8）**諸菩薩、阿羅漢，皆心淨潔，所飲食但用作氣力爾。皆自然消散，靡盡化去**　『平等覚経』は「……皆心清潔不慕飯食，但用作氣力耳。……」と少し改めている。この部分は，梵本の *na khalu punar Ānanda Sukhāvatyāṃ lokadhātau sattvā audārikaṃ kavaḍīkārāhāram āharanti. api tu khalu punar yathārūpam evāhāram ākāṃkṣanti, tathārūpam āhṛtam eva saṃjānanti, prīṇitakāyāś ca bhavanti prīṇitagātrāḥ. na teṣāṃ bhūyaḥ kāye prakṣepaḥ karaṇīyaḥ*（また，実に，アーナンダよ，極楽世界にいる生ける者たちは，粗大な物質的食物を摂らな↗

気力を出させるためのもので，（口にいれた飲食物も）みなすっと消え去り，なくなってしまう[9]。」

[10] 仏は阿難に仰った。

「阿弥陀仏が菩薩・阿羅漢に教えを説くとき，みな[11]大挙して講堂に集まる。無数で全く数えられないほどの菩薩・阿羅漢，神々や人々が，みな阿弥陀仏のもとへ飛んできて，仏に礼拝し，退いて坐り，教えを聴く。仏は，さとりへの智慧に関する大いなる教え[12]を詳しく説く[13]。みな（その教えを）聴聞して，誰もが踊らんばかりに歓喜し，はっきり理解する[14]。（すると）すぐさま四方から自然のつむじ風[15]が起き，七宝樹に吹くと，（七宝樹は）みな様々な音色をたてる。（風に吹かれた）七宝樹の花はその国中をすっかり覆い，みな空中で下を向いて留まる。その花の香りは国中に満ちる。（花は）みな阿弥陀仏と菩薩・阿羅漢の上に散る。花は地面に落ち，厚さ四寸にもなる。少ししおれると，すぐさまつむじ風が吹き，(307b)しおれた花はふっとなくなる。（するとまた）四方からつむじ風が起きて七宝樹に吹き，（……）このように，四度くり返す。

すぐさま，（下から）第一番の四天王，第二番の忉利天，さらに三十三天までの神々が[16]，みな天上（に生じた）あらゆる種類の自然の物，あまたの種類の色とりどり

↘い。

そうではなくて，どのような食物を欲しようと，まさにそのとおりのものを摂ったと感知し，身体は飽満し，四肢が飽満する。かれらには，それ以上，身体にとり入れる必要がないのである［藤田 1975: 101］)，『無量寿経』の「雖有此食，實無食者。但見色，聞香，意以爲食，自然飽足，身心柔軟，無所味著。事已化去，時至復現」(271c2 ～ 4) に対応する。「作氣力」という表現の意味が明確でない。

9) **靡盡化去**　高麗蔵本と金蔵本などには「摩盡化去」とあるが，元・明本により改める。『平等覚経』には「糜（*v.l.* 靡）盡化去」(287b17;『一切経音義』大正蔵第 54 巻，405a8. 糜盡) とある。本経の後半には「欲得他人財物，用自供給，消散靡盡」という表現が出る (314a23)。

10) 以下の部分，諸本との対照は，香川 1984: 288 ～ 289 を参照。『平等覚経』と『無量寿経』のみに対応がある。

11) **都悉**　類義字を重ねた表現。Zhu.128 を参照。

12) **道智大經**　「さとりへの智慧に関する大いなる教え」あるいは，いわゆる「大乗」の教えの意味であろう（この点に関しては，辛嶋静志「法華経における乗 (yāna) と智慧 (jñāna) ―大乗仏教における yāna の概念の起源について―」，田賀龍彦編『法華経の受容と展開』，京都，1993 年［平楽寺書店］，168 頁を参照)。平川彰博士が「道智大経」を最古の大乗経典と考える (『初期大乗仏教の研究』春秋社，1968: 120f.) のは誤りである。訳注 (一) 注 (19) を参照。

13) **廣説**　Krsh (2001). 109; Krsh (1998). 171. 廣 (guǎng) を参照。

14) **開解**　訳注 (一) 注 (5)，Krsh (2001). 151 を参照。

15) **亂風**　訳注 (三) 注 (99) を参照。

16) **第一四天王、第二忉利天上至三十三天上**　底本の「三十二天」を金蔵本などにより「三十三天」に改める。訳注 (四) 注 (37) を参照。その注で述べたように，「第二忉利天」は本来註釈の語だったものが本文に紛れ込んだものと思われる。「忉利天」については訳↗

の花，あまたの種類の香，あまたの種類の綾錦[17]，あまたの種類の木綿製の衣[18]，あらゆる音楽と舞い――（これらは天が上方になるにつれて）倍々にすばらしく，すぐれたものになるのだが――，これらをそれぞれたずさえて降りてきて，阿弥陀仏を礼拝した後，（阿弥陀）仏と菩薩・阿羅漢たちに供養する。

神々はみな[19]盛んに音楽と舞いを演じ，阿弥陀仏と菩薩・阿羅漢たちを楽しませる。この時の快さは何とも言えない。[20]神々は，（お互い邪魔にならぬよう）順々に場を明け渡し，後から来る者も次々と前の者同様に供養する。

[21]すると，東方の無数の仏国――その数たるや，ガンジス河の岸辺の砂[22]の一粒一粒を一人の仏に換算したほどに，数え切れないものだが――，そこの仏たちがそれぞれ無数，無量の菩薩を遣わし，（菩薩たちは）みな阿弥陀仏のもとへ飛んで来て，礼拝し，教えを聴き，みな大変歓喜して，立ち上がって礼拝し，[23]また去って行く。

同様に，西方・北方・南方および（北東・南東など）四隅の仏たち――それぞれの（方角に）ガンジス河の岸辺の砂の数ほどおられるが――それぞれが，無数の菩薩を遣わし，彼らは阿弥陀仏のもとへ飛んで来て，礼拝し，教えを聴く。すると，下方・上方の仏たち――それぞれの（方角に）ガンジス河の岸辺の砂の数ほどおられるが――それぞれが，まったく数え切れないほどの菩薩を遣わし，彼らは阿弥陀仏のもとへ飛んで来て，礼拝し，教えを聴き，（お互い邪魔にならぬよう）順々に場を明け渡す。このように絶え間がない。」

↗注（三）注（92）を参照。この部分，『平等覚経』では「第一四天王諸天人、第二忉利天上諸天人、第三天上諸天人、第四天上諸天人、第五天上諸天人、第六天上諸天人、第七梵天上諸天人、上至第十六天上諸天人，上至三十六天上諸天人」（287c6f.）と大幅に水増しされている。

17）**繒綵**　訳注（四）注（16）を参照。

18）**劫波育疊衣**　「劫波育」は Skt. *kārpāsika,* BHS. *karpāsika,* Pa. *kappāsika*（木綿の布）に対応する音写語。訳注（四）注（17）を参照。疊（＝氈）衣は辞書類に採られていないが，木綿の衣のこと。

19）**皆復**　この「復」は二音節にするために加えられた接尾辞でそれ自体は意味がない。訳注（三）注（4）を参照。

20）**諸天更相開避，後來者轉復供養如前**　本経の別の箇所に「諸天人前來者轉去，避後來者；後來者轉復供養如前，更相開避」（306c26f.；訳注［四］33 頁）と類似の表現がある。訳注（四）注（39）（40）も参照。本経の表現は，『平等覚経』では「諸天人前来者轉去，避後来者。後来者轉復供養如前，更相開避」（287c16f.）と改められている。また『無量寿経』でも「前後來往更相開避」（273c21）と踏襲されている。

21）以下の部分，諸本との対照は，香川 1984: 254 ～ 255 を参照。

22）**恒水邊流沙**　「流沙」は普通「砂漠の砂」の意味だが（HD.5.1262b 参照），ここでは「川砂」の意味。『無量寿経』は「恆（v.l. 恆河）沙」，梵本は，*Gaṅgānadī-vālukā-*（ガンジス河の砂）。

23）**如去**　高麗蔵本と金蔵本にはこうあるが，宋版などには「而去」とある。『平等覚経』にも「而去」とある（287c23）。「如」と「而」はしばしば交替する（訳注［一］注［24］・訳注［二］注［76］を参照）。

[24] 仏は仰った。

「諸仏をガンジス河の岸辺の砂の数で喩えるのは，八方上下の無数の仏たちは大変数多く，全てを数えるのは不可能。だからガンジス河の岸辺の砂の数で喩えるのだ。」

[25] 仏は阿難に仰った。

「阿弥陀仏が菩薩・阿羅漢のために教えを説き終わると，神々や人々の中にそれまでまだ道を得ていない者がいれば，その場で道を得る。須陀洹道をまだ得ていない者は，その場で須陀洹道を得，まだ斯陀含道を得ていない者は，その場で斯陀含道を得，まだ阿那含道を得ていない者は，その場で阿那含道を得，まだ阿羅漢になっていないものは，その場で阿羅漢になり，まだ不退転の菩薩になっていないものは，その場で不退転の菩薩になる。

阿弥陀仏は，これら（衆生）が前世で道を求めていた時の願いの大きさに応じて，自在に教え[26]を説き与え，[27]その場ですぐにはっきり理解させ，すべてに通じた智慧を得させる。誰もがみな（307c）願っていた教え[28]を気に入り，喜ぶ。それを繰り返し読誦するものは，一人でよどみなく暗誦し，飽き疲れることを知らない[29]。

菩薩・阿羅漢たちで，経を読誦する者がいるが，その声は三百箇の鐘の音[30]のようであるし，（また）教えを説く者がいるが，[31]あたかも暴風雨の時のような（響き

24）以下の一文は，他の諸本に見られない。本経を踏襲した『平等覚経』にも見られないから，『平等覚経』の訳者の見た原典にもなかったのであろう。内容的にも，経文というよりも，注釈の感じがする。なお，この部分に，他の諸本はいわゆる東方偈がある（香川 1984: 256 ～ 269）。

25）以下の部分，諸本との対照は，香川 1984: 180 ～ 181 を参照。

26）**經**　高麗蔵本と金蔵本及び『平等覚経』にはこうあるが，宋版などには「經典」とある。

27）**即令疾開解得皆悉明慧**　難解。『平等覚経』には「令其疾開解得道。皆悉明慧……」とあり，これの方が分かりやすい。しかし，本経の後半に「今八方上下諸天，帝王，人民及蜎飛蠕動之類，得佛經戒，奉行佛道，皆得明慧，心悉開解，莫不得過度解脱憂苦者」（316b8f.）という表現があることから，あえて「得皆悉明慧」で「すべてに通じた智慧を得（させる）」と理解した。要検討。「開解」は訳注（一）注（5）を参照。

28）**經道**　訳注（一）注（4），（19）を参照。

29）**無厭無極**　「厭」と「極」は類義語。「極」はしばしば「疲れる」の意味で使われるが（HD.4.1135a［14］；訳注［三］注［43］「困極」を参照），ここでは「倦む」の意味かもしれない。なお，これら類義語を重ねた「厭極」（倦む，飽きる）という熟語は，漢代の外典にも見えるが（HD.1.944a［定義は間違ってる］），仏典でも多出する。例えば，竺法護訳『修行道地経』「於諸衣食而知止足。志存經道而無厭極」（大正 15, 182b21）；竺法護訳『正法華経』「世尊面像充滿如日，安住道目猶如月初，一切觀之，而無厭極」（大正 9, 132b5）；『佛般泥洹經』大正 1, 164a15.「我視佛無厭極」など。

30）**三百鐘聲**　『平等覚経』は「雷聲」に改めている（289a13）。

31）**如疾風暴雨時。如是盡一劫竟**　この位置での「時」は問題。『平等覚経』には「如疾風暴雨。時諸菩薩、阿羅漢説經行道皆各如是。盡一劫竟」（289a14f.）とあるが，これの方が分かりやすい。

である？）。このようにまるまる一劫の間，まったく倦むことを知らない。

みな智慧あり，勇敢で，体は軽やかで[32]，痛み・痒みといった感覚を感じたり，疲れることは全くない[33]。行住坐臥において，みな[34]才気と逞しさと勇ましさがあって[35]，それはあたかも獅子の王が深い山の中でどこに向かおうと，面と向かって来る者はなく，ためらいなく，[36]思うがままに行動し，（他の者はその行動を）予測することができない様なものである。[37]この勇敢な獅子の（勇敢さを）百千億万倍にしても，私の第二弟子，摩訶目揵連の勇敢さの百千億万の一にも及ばない。摩訶目揵連は諸仏国の菩薩・阿羅漢になかで，もっともすぐれていて，空を飛び，進むも止まるも（自在で），智慧あり，勇敢で，（一切を）見通し，（あらゆる音を）はっきり聞き分け[38]，八方上下の過去・未来・現在のことを知っている。（その摩訶目揵連の智慧を）百千億万倍あわせたほどの智慧を持つ者でも，もし[39]，阿弥陀仏国の阿羅漢たちのかたわらに並べば，彼の徳は（後者の）百千億万の一にも及ばない。」

すると，[40]阿逸菩薩が立ち上がって前に進み出，膝立ちし合掌して[41]，仏に尋ねた。

「[42]阿弥陀仏国の阿羅漢たちの中には，[43]完全な涅槃[44]を遂げて去って行かれる方もおられるのでしょうか。お聞かせ下さい。」

32）**輕便**　類義語を重ねた語。六朝代の文献から見える。Krsh (1998). 334 を参照。
33）**終無痛痒極時**　この「極」は難解。一往「疲れる」の意味と考えた。
34）**悉皆**　仏典から見える表現。Krsh (1998). 482 参照。本経にも多く出る。
35）**才健勇猛**　「才健」は辞書にない表現。訳注（二）注（69）「才猛」も参照。
36）**在心所作，爲不可豫計**　「諸佛…自在意所欲作爲，不豫計」（302c28f.; 訳注［二］注［6］参照），「佛…自然所欲作爲。意欲有所作爲，不豫計」（309c11f. 注［154］参照）という類似した表現が他の箇所にでる。「在心所～」（自在に～する）という表現については，訳注（一）注（55）を参照。
37）**百千億萬倍是猛師子中王**　原文には「百千億萬倍是猛師子中王，百千億萬倍」とあるが，二番目の「百千億萬倍」を衍字と見た。なお，『平等覚経』の訳者，支謙もこの表現を解しなかったようで，本経に「無有疑難之意，在心所作，爲不可豫計。百千億萬倍是猛師子中王，{百千億萬倍}，尚復不如我第二弟子摩訶目揵連」とあるところを，「無量清淨佛國諸菩薩、阿羅漢説經行道，皆勇猛，無有疑難之意，則在心所作爲，不豫計，百千億萬倍是猛師子中王也。如是猛師子中王百千億萬倍，尚復不如我第二弟子摩訶目揵連……」（289a19f.「無量清浄仏国の菩薩・阿羅漢はみな勇敢に教えを説き，仏道を行い，ためらいがなく，思うがままに行動し，［他の者はその行動を］予測することができない。それは猛き獅子王の百千億万倍である。このような猛き獅子王の［勇敢さが］百千億万倍であっても［？］，私の第二弟子，摩訶目揵連……」）と大幅に書き改めている。
38）**洞視徹聽**　訳注（一）注（87）を参照。
39）**當令**　訳注（三）注（68）参照。
40）**阿逸**　Skt. *Ajita*（弥勒 *Maitreya* の呼び名）の音写。本経と『平等覚経』ではここから仏の説法の相手が，突然阿難から阿逸に変わる。「はじめに」参照。
41）**長跪叉手**　訳注（一）注（9）参照。
42）以下には，阿弥陀仏国の阿羅漢の中には，般涅槃して去って行くものがいることを述べている。これは本経と『平等覚経』にのみ見える記述である。

仏は仰った。

「君が知りたいなら[45]，（さて）君にはこの全世界の星が見えるかね。」

阿逸菩薩は答えた。

「はい。見えます。」

仏は仰った。

「私の第二弟子，摩訶目揵連ときたら，天に飛び上がり，（たった）一昼夜で，星が幾つあるかすっかり数え上げることができる。全世界には数え切れないほど沢山星があるが，（阿弥陀仏国の阿羅漢の数は）これら星の百千億万倍もあるのだ。

[46]世界の大海の水というものは，（人が）一滴を汲んだら，[47]減少したと分かるほど海水を減らすことが（308a）できるものだろうか。」

（阿逸菩薩は）答えた。

「百千億万斗（と）石（こく）汲んでも，減少したと分かるほど減らせるものではありません。」

仏は仰った。

「阿弥陀仏国の阿羅漢たちの中には，完全な涅槃を遂げて去って行くものもいるが，それは大海の水が一滴減ったようなもので，[48]減少したと分かるほど，そこにいる阿羅漢たちの数が減るものではない。」

仏は仰った。

「大海から谷川一つ分の水を減らしたならば，（大海の水を目に見えて）減らせるだろうか。」

（阿逸菩薩は）答えた。

「谷川百千億万本分の水を減らしても，減少したと分かるほど減らせるものではあ

43）**寧頗有般泥洹去者無？**　『平等覚経』には「寧頗有般泥洹去者不？」とある。「寧～不（あるいは無）」「頗～不（あるいは無）」だけでも疑問を表すが（Krsh［1998］. 303; Krsh［2001］. 191, 195, 402 を参照），ここでは二つの疑問詞を重ねた「寧頗～無」「寧頗～不」という他に例を見ない表現を使っている。

44）**般泥洹**　「般涅槃」の古訳形。Krsh (1998). 10, Krsh (2001). 412 を参照。

45）**若欲知者**　「若」はここでは「もし」ではなく「君」の意味。「佛告阿逸菩薩：“若欲知阿彌陀佛壽命無極時不？”（君は阿弥陀仏の寿命が無限であることを知りたくはないかね）」（308c27f.）という類似の表現を参照。

46）以下の部分，諸本との対照は，香川 1984: 182 ～ 183 を参照。

47）**寧能令海水爲減，知少不耶？**　『平等覚経』では「寧能令海水爲減不？」（289b12）と分かり易くなっている。「寧～不耶」で疑問を表す。

48）**不能令在諸阿羅漢爲減知少也**　この「在」は分かりにくい。『平等覚経』では「不能令諸在阿羅漢爲減知少也」（289b15）……「不能減諸在阿羅漢，爲減知少也」（289b20）と変えている。本経の「在諸」は「諸在」と同じく「あらゆる」の意味であろうか。

りません。」

仏は仰った。

「大海からガンジス河一つ分の水を減らしたならば，（大海の水を）目に見えて減らせるだろうか。」

（阿逸菩薩は）答えた。

「ガンジス河百千億万本分の水を減らしても，減少したと分かるほど減らせるものではありません。」

仏は仰った。

「阿弥陀仏国の阿羅漢で，完全な涅槃を遂げて去って行く者は無数にいるが，そこにいる者で新たに（阿羅漢）道を得る者も無数だから，増減はまったくないのだ。」

仏は仰った。

「世界のあらゆる河川の水を大海の中に流し込んで，大海の水を増やすことが出来るか。」

（阿逸菩薩は）答えた。

「増やせません。なぜなら，[49] 大海は世界のあらゆるすぐれた河川の中の王者だからそうなのです[50]。」

[51] 仏は仰った。

「阿弥陀仏国も（大海と）同様である。八方上下のそれぞれの（方角の）無数の仏国の神々や人々や飛ぶ虫・這う虫などをみなそこに生まれさせ，その数は計り知れないほど多い。（しかし）阿弥陀仏国の菩薩・阿羅漢たちや比丘たち（の数）は，[52] やはり常に一定で，とくに増えるということはない。どうしてこうなのか[53]。阿弥陀仏国は[54] もっともすばらしく，八方上下のそれぞれの（方角の）無数の仏国の中でも[55] 最高にすぐれた王者であり，諸仏国の中の雄，諸仏国の中の宝，諸仏国の中で（衆生が）最も長寿な国であり，諸仏国の中で[56] 傑出したものであり，諸仏国の中で（もっ

49）**是大海爲天下諸水衆善中王**　『平等覚経』も同じ。この「衆善」が分かりにくく，宋版などは削除している。すぐ後に「阿彌陀佛國……八方上下無央數諸佛國中衆善之王」（308a11f.）とあるのを参照。

50）**故能爾耳**　「能爾」は「このように」の意味。HD.6.1271a には『顔氏家訓』の例が挙げられている。

51）以下の部分，諸本との対照は，香川 1984: 184 ～ 185 を参照。『平等覚経』以外とはあまり対応しない。

52）**故如常一法**　『平等覚経』は「都如常一法」（289c5）に変えている。この「故」は「やはり，なお」（＝猶）の意味。Krsh (1998). 168, Krsh (2001). 108 を参照。

53）**所以者何**　この設問より前の部分と，以下の解答の部分が，論理的につながらない。

54）**最快**　この場合の「快」は「好い，すばらしい」という意味。訳注（一）注（18），訳注（二）注（10）を参照。

とも）広大であり，[57] 諸仏国の中の都（のようなもの）であり，無為自然という点で[58]，もっともすばらしく，明るく美しく[59]，心地よいことこの上ないからだ。どうしてこうなのか。阿弥陀仏が菩薩だった時，いさましい願を立て，怠ることなく精進し，徳を重ねた結果，こうなったのだ[60]。」

すると阿逸菩薩は大変歓喜し，膝立ちし合掌して言った。

「仏は阿弥陀仏の国がすばらしく[61]，明るく美しく，比べるものがないほど立派なことを説かれました。なんと（阿弥陀仏国）だけがこうなんですね！[62]」

仏は仰った。

「阿弥陀仏国の菩薩・阿羅漢の七宝の住所には，空中にあるものも地上にあるものもある。（菩薩・阿羅漢の）中で，住居が最も高いことを望む者がいれば，住居は高く，住居が最も大きいことを望む者がいれば，住居は大きい。住居が空中にあることを望む者がいれば，住居は空中に浮かぶ。すべて自由自在，彼らの思うがままである[63]。中には住居が全く思いのままにならない者もいる。どうしてそうなるのか。住居を思いのままにすることが出来る者は，みな前世・過去世で[64] 道を求めていた時，慈しみの心をいだいて精進し，大いに[65] 数多くの善行をなして，功徳を多く積んだからである。全く思いのままにならない者は，みな前世・過去世で道を求めていた時，慈

55）**衆善之王**　この「衆善」も分かりにくい。注（49）を参照。『平等覚経』は「衆菩薩中王也」（289c7）に変えているが，おそらくどこかの段階で「善」が「菩」と読み誤れたのだろう。

56）**衆傑**　難解。『平等覚経』も同じ。「多くのなかで傑出している」の意味か。

57）**諸佛國中之都。自然之無爲，最快，明好，甚樂之無極**　『平等覚経』は「無量清淨佛國爲諸無央數佛國中都自然之無爲也（無量清浄仏国は無数の仏国の中で無為自然さが集まったところである?）。無量清淨佛國爲最快，明好，甚樂之無極也」（289c13f.）に変えている。

58）**自然之無爲**　「自然」は訳注（一）注（12）を参照。「無爲」は『老子』の中心思想であり，人為を働かすことをやめることを指し，道家の理想の境地。仏教では，*nirvāṇa*（涅槃）や *asaṃskṛta*（因果による生成を超えたもの）の訳語に使われる。Krsh (1998). 472, Krsh (2001). 289 を参照。

59）**明好**　訳注（二）注（9）を参照。

60）**故能爾耳**　注（50）を参照。

61）**快善**　訳注（一）注（18）を参照。

62）**乃獨爾乎**　後にも類似の表現が見える。「阿逸菩薩聞佛言，大歡喜，長跪叉手，言："佛説阿彌陀佛壽命甚長，威神尊大，智慧光明巍巍快善。乃獨如是！"」（309a14）

63）**皆自然隨意，在所作爲**　「自然隨意」は「比如第六天上自然之物，恣若自然，即皆隨意」（第六天ではものが自在に生じるように，［その国でも］すべてが自由自在，意のままになる）（303c7f.）という類似の表現を参照。おそらく「自然」はここでは「自在」と同義（注［154］参照）。「在所～」は「在心所～」（訳注［一］注［55］），「在意所～」（訳注［四］注［21］）と同じく，「自在に～する」の意味。注（5）及び Krsh (2001). 353 を参照。

64）**前世宿命**　「前世」と「宿命」は同義。訳注（二）注（4）を参照。

65）**益**　「ますます」ではなく「大いに」の意味。訳注（三）注（51）を参照。

しみの心をいだいて精進したり，大いに数多くの善行をなすということをせず，徳をあまり積まなかったのである。（阿弥陀仏国の衆生の）着る物，食べ物[66]は（308b）いずれも自然（に現れ），平等である。[67]（しかし，積んだ）徳には違いがあるから，（徳の）優れた者を区別し[68]，（住居の違いでそのことを）衆生に示すのである。」

仏は仰った。

「君は第六天王（他化自在天）[69]の住まいを見たことがあるか。」

「はい見たことがあります。」

仏は仰った。

「阿弥陀仏国の講堂と住居はみな[70]第六天王の住まいよりも百千億万倍もすぐれている。

（阿弥陀仏国の）菩薩・阿羅漢はみな[71]（一切を）見通し，（あらゆる音を）はっきり聞き分け[72]，八方上下の過去・未来・現在のことを知っている。また無数の天上天下の人々や飛ぶ虫•這う虫が心に思っている善悪や言いたいことを知っているし，（これら衆生が）いったい何年後，何劫後，（輪廻から）度脱でき，人間[73]となって，阿弥陀仏国に生まれることができるのかを知っているし，[74]（誰が）いったい菩薩・阿羅漢になるのか，すべて予知している。

[75]（阿弥陀仏国の）菩薩・阿羅漢はみな頭頂から自然に光明を放ち，その照らす範囲に違いがある。

菩薩たちのなかに，最も尊い二人がいて，いつも佛の脇にいて仕え，ひたすら論じている[76]。佛は常にこの二人の菩薩と向かい合って坐り，八方上下の過去・未来・現在のことについて話し合っている。もし，この二人の菩薩を，八方上下の無数の仏

66）飯食　宋版などには「飲食」とある（＝『平等覚経』）。
67）徳有大小　『平等覚経』は「是故不同，徳有大小」（290a2）に改めているが，意味が通じない。
68）別知　「区別する」の意味。Krsh (2001). 22 には『妙法蓮華経』「又復別知衆生之香――象香、馬香、牛、羊等香、男香、女香、童子香、童女香，及草木、叢林香，若近、若遠所有諸香，悉皆得聞，分別不錯」（T.9, 48b24f.）の例が挙げてある。
69）第六天王　訳注（一）注（49）を参照。
70）都復　この「復」は二音節にするために加えられた接尾辞でそれ自体は意味がない。訳注（三）注（4）「皆復」;訳注（四）注（39）轉復;Zhu 148f.; Hu 255f. を参照。『平等覚経』は「倍復」（290a5; cf. Zhu 148）に改めている。
71）悉皆　訳注（二）注（64）を参照。
72）洞視徹聴　訳注（一）注（87）を参照。
73）人道　仏典では「人間としての生存」の意味。訳注（一）注（23）参照。
74）當作菩薩、阿羅漢　『平等覚経』は「當作菩薩道，得阿羅漢道」（290a9f.）に改めている。
75）以下の部分，諸本との対照は，香川 1984: 276 ～ 277 を参照。

の許へ遣わそうとすると，彼らはすぐに飛んでゆき，望むがままに行ってくれる[77]。仏の様に速く[78]飛行し，その勇猛さは比肩する者がいない。その内の一人の菩薩は「盧楼亘（こうろうかん）」[79]という名である。もう一人の菩薩は「摩訶那鉢（まかなはつ）」[80]という名である。（彼らは）光明と智慧において最もすぐれていて，それぞれの頭頂の光は，他方の千の須弥山仏国[81]を照らし，それらは（そのせいで）いつもとても明るい。（阿弥陀仏国の）菩薩たちの頭頂の光明は，それぞれ千億万里を照らす。阿羅漢たちの頭頂の光明は，それぞれ七丈を照らす。」

仏は仰った。

「[82]世間の人々，あるいは善男子・善女人が，[83]差し迫った恐怖や役人の横暴に遭ったとき，ただこの盧楼亘菩薩・摩訶那鉢菩薩に帰命しさえすれば，必ずや（危機を）脱する。」

[84]仏は阿逸菩薩に仰った。

「阿弥陀仏の頭頂の光明はとても光り輝く。その（仏国の）太陽・月・星々は，み

76）**坐侍正論**　『平等覚経』は「坐侍政論」（290a11）に改めている。「坐侍」は「そば仕えする」の意味（HD.2.1046a は『新唐書』の例を挙げている）。「正論」の「正」は「ただ，ひたすら」（＝只）の意味。Cf. GHX 831, Li 30.

77）**隨心所欲至到**　「隨心所欲～」で「隨意所～」（訳注［三］，注［96］参照），「在意所欲」（訳注［四］，注［21］参照）と同じく，「自在に～する」の意味。

78）**駛疾**　高麗蔵・金蔵には「使疾」，宋版・元版には「駃疾」（＝『平等覚経』），明版には「駛疾」とある。「駃」「駛」「疾」はいずれも「速い」の意味。「駃」と「駛」は字体が似ていてよく混同される（cf. HD.12.812b. 駃疾）。王日休校輯『大阿弥陀経』（大正蔵第 12 巻所収）にも「駛疾」とある（336a11）。

79）**盧樓亘**　高麗蔵本にのみ「蓋樓亘」とあるが，金蔵本などにより改める。『平等覚経』も「盧樓亘」（290a22）。「盧樓亘」は推定中古音 ʔâp ləu sjwän. *Avalokitasvara*（観音）に対応する音写。*Avalo...svar* という原語の音が推定されるが，正確な原語の形を復元することは不可能である。観音の語義については，辛嶋静志「法華経の文献学的研究（二）―観音 Avalokitasvara の語義解釈―」『創価大学・国際仏教学高等研究所・年報』第 2 号（1998），pp. 39-66 を参照。

80）**摩訶那鉢**　mwâ xâ nâ-[nâ:] pwât.『平等覚経』も「摩訶那鉢（*v.l.* 盆）」（290a22. 高麗蔵本は「摩訶那」に誤る。金蔵本により改める）。梵本の *Mahāsthāmaprāpta*,『無量寿経』などの「大勢至」に対応する音写。原語の形は不明。

81）**須彌山佛國**　「（一つの）須弥山を有する（一つの）仏国」すなわち「一仏国」という意味か。訳注（二）注（41）を参照。

82）**世間人民若善男子、善女人，若有急恐怖、縣官事者，但自歸命是盧（←蓋）樓亘菩薩、摩訶那鉢菩薩所，無不得解脱者**　『法華経・普門品』に説かれる観音への帰依の功徳を彷彿とさせる（竺法護訳『正法華経』［大正蔵第 9 巻，128c ～］;鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』［同 56c ～］）。おそらくは，『法華経』も『大阿弥陀経』も当時流行していた観音信仰をそれぞれの経典の中に取り込んだのであろう。辛嶋静志前掲論文を参照。

83）**若有急恐怖、縣官事者**　『平等覚経』は「若有一（*v.l.* -）急恐怖，遭縣官事者」（290a26），王日休校輯『大阿弥陀経』は「若有急難恐怖，或値官事」（336a14）と改めている。「縣官」は古典から見える語。HD.9.965b には『史記』・『漢書』の例を挙げている。

84）以下の部分，諸本との対照は，香川 1984: 232 ～ 233 を参照。

な空中にじっと止まり[85]，回転も運行もせず，またきらきらした輝き[86]はなく，それらの光は（仏の光明に）覆われて現れない。（阿弥陀）仏の光は仏国中を照らし，また他方の仏国も照らし，それらの国々は常にとても明るく，暗くなる時がない。

[87]その国には，一日も二日もなく，五日も十日もなく[88]，十五日も一ヶ月もなく，五ヶ月，十ヶ月，五年，十年もなく，百年，千年もなく，万年，億万年もなく，百（308c）千億万年もなく，一劫，十劫，百劫，千劫もなく，万劫も百万劫もなく，千万劫も百億万劫もない。

阿弥陀仏の光明は，極まりなく明るく，未来[89]無数劫，無数劫のまた無数劫，無数の無数劫の間，暗くなる時は全くない。その国土や諸天が壊れる時は決してない。というのは，阿弥陀仏の寿命は非常に長く，国土もとてもすばらしいからである[90]。

[91]その仏尊は長寿で，未来無数劫，さらに無数劫経ってもなお完全な涅槃を望まない。世間で教え，八方上下の無数の仏国の神々や人々・飛ぶ虫・這う虫をみな（輪廻から）救済し[92]，全ての者をその国に生まれさせ，皆に涅槃への道を得させようと願っている。

（阿弥陀仏は）菩薩となった者をみな仏にならせようと思っている。彼らが仏になって，次々と[93]八方上下の神々や人々・飛ぶ虫・這う虫に教えを授け，みな仏とならせる。（それらが）仏となってさらに無数の神々や人々・飛ぶ虫・這う虫に教えを授け，涅槃への道を得させて去る。[94]教えられた弟子たちもさらに順々に[95]教え，順々に[96]（輪廻から）救済し，須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・独覚の道を得させる。こ

85）**住止**　本経など後漢代の漢訳仏典から現れる表現。Cf. Krsh (1998). 606, Krsh (2001). 369.
86）**精光**　「輝き」。HD.9.217b には漢代の例を挙げている。
87）以下の部分，諸本との対照は，香川 1984: 234 ～ 235 を参照。『平等覚経』以外の諸本に対応なし。
88）**無**　大正蔵本の「爲」は誤植。
89）**却後**　訳注（二）注（32）を参照。
90）**故能爾耳**　注（50）を参照。
91）**其佛尊壽, 却後無數劫, 重復無數劫, 尚未央般泥洹也**　『平等覚経』は「無量清淨佛尊壽, 却（←劫）後無數劫尚（←常）無央，無般泥洹時也」（290b-9f.「無量清浄仏尊の寿命は未来無数劫たってもまだ尽きず，完全な涅槃に入る時がない」）と書き換えている。「壽」は，本経では「長生き」の意味だが，『平等覚経』では「寿命」の意味と考えられる。また「央」（磧砂蔵本などには「欲」とある）は，本経では「求める」の意味だが，『平等覚経』では「尽きる」の意味と考えられる。後に出る「尚未欲般泥洹」（308c17）という表現を参照。
92）**過度**　訳注（一）注（36）を参照。
93）**轉復**　訳注（四）注（39）を参照。
94）**諸可教授弟子者**　この「可」は「所」と同義。訳注（三）注（2）を参照。
95）**展轉復相**　「互いに」の意味もあるが，ここでは「次々に」の意味。Cf. Krsh (1998). 577. 展轉；Krsh (2001). 358. 展轉.
96）**轉相**　「互いに」の意味もあるが，ここでは「次々に」の意味。訳注（三）注（20）を参照。

のように順々に（輪廻から）救済し，涅槃への道を得させるのだが，（阿弥陀仏は）それでもまだ完全な涅槃に入ろうとしない。阿弥陀仏はこのように順々に（輪廻から）救済し，さらに無数劫，また無数劫，計り知れない程の劫の間，留まり，完全な涅槃に入ることがない。

八方上下の無数の神々や人々・飛ぶ虫・這う虫で，阿弥陀仏国に生まれ，仏となるであろう者は[97]とても数え切れない。阿羅漢となって，涅槃の道を得る者もまた無数であり，全く数え切れない。

阿弥陀仏は，八方上下に窮まりなく恩徳を施し，（その恩徳は）量り知れないほど（意義）深く，表現できないほどすばらしい[98]。

（阿弥陀仏は）その智慧で（自ら考え）出した教義[99]を教え，八方上下の無数の世界に広く告げているが，[100]（その数は）全く知り得ない。

（阿弥陀仏の）経巻の数の多さは数え切れず，はてしなく多い。」

[101]仏は阿逸菩薩に仰った。

「君は阿弥陀仏の寿命が無限であることを知りたいか。」

（阿逸菩薩は）応えた。

「[102]願わくば，それについてすべて聞きたく存じます。」

仏は仰った。

「よく聞きなさい。[103]八方上下の無数の仏（309a）国の神々や人々・飛ぶ虫・這う虫みなを人間[104]にならせ，みな独覚・阿羅漢にならせて，みんなで一緒に坐禅して心を集中して[105]，その智慧を合わせて，精神力を一つにして，阿弥陀仏の寿命が

97）**不可復勝數**　『平等覚経』も同じ（290c8）。同じ表現が『仏印三昧経』（大正蔵第15巻，343a9）にも見える。「可復」はKrsh（2001）．417参照。「勝」は「すっかり，全て，残らず」の意味（GHX.505）。

98）**快善**　訳注（一）注（18）を参照。

99）**經道**　訳注（一）注（4），（19）を参照。

100）**甚不原也**　「甚不」で「まったく～でない」の意味であろう。後には「都不可復計，甚無央數」（309b25），「甚無比」（309c16）という表現が出るが，この「甚無」も「まったく～でない」の意味。「原」は「探求する，尋ねる」の意味。『平等覚経』は「甚多不原」（290c13）に変えている。

101）以下の部分，諸本との対照は，香川1984: 186～187を参照。『平等覚経』・『無量寿経』以外の諸本とはあまり対応しない。

102）**願皆欲聞知之**　『平等覚経』も同じ（290c16）。後にも「阿難……言：“願皆欲見之。”」（316b25）という類似表現が出る。

103）本経の第十九願が成就した様を描いている。この部分は『平等覚経』と『無量寿経』にのみ対応がある。

104）**人道**　高麗蔵には「入道」とあるが，その他の諸本により改める。

105）**坐禪一心**　「坐禪」も「一心」（訳注［一］注［105］を参照）も「精神を統一すること。禅定」の意味。

幾千億万劫歳であるかを計ろうとしても，全く計り知ることが出来ない。

[106] さらに，他方のそれぞれ千の須弥山仏国[107]の神々や人々・飛ぶ虫・這う虫みなを人間[108]にならせ，みな独覚・阿羅漢にならせて，みな一緒に坐禅して心を集中させ，皆でその智慧を合わせ，精神力を一つにして，阿弥陀仏国の菩薩・阿羅漢が幾千億万人いるかを数えようとしても，その数を知ることは全く出来ない。

[109] 阿弥陀の寿命はとても長く，[110] ひろびろあかあか，明るくすばらしく，奥深く，果てしない。[111] それを一体誰が知り信じることができよう。ただ仏だけがはっきり知っているのである。」

阿逸菩薩は仏の言葉を聞いて，大変歓喜し，膝立ちし合掌して言った。

「仏は，阿弥陀仏の寿命が大変長く，偉大な超人的力をもち，智慧の光は明々として[112]，すばらしい[113]ことを説かれました。[114] なんと（阿弥陀仏）だけがこうなんですね！」

仏は仰った。

「阿弥陀仏がやがて完全な涅槃に入れば，盧楼亘[115]菩薩がすぐに仏になる。[116] さとりへの智慧を把握し，教えることを把握して，世間や八方上下で神々や人々・飛ぶ虫・這う虫を（輪廻から）救済し[117]，さらに皆に仏の涅槃への道を得させる。そのすばらしい福徳は，[118] 偉大な師，阿弥陀仏と同じであるはずだ。無数劫，無数劫，

106）本経の第二十願が成就した様を描いている。この部分は『平等覚経』と『無量寿経』にのみ対応がある。

107）須彌山佛國　注（81）参照。

108）人道　高麗蔵本には「入道」とあるが，その他の諸本により改める。

109）以下の部分，『平等覚経』にのみ対応文がある（香川 1984: 186 ～ 187 を参照）。

110）浩浩照照明善　資福蔵本には「浩浩晧晧明善」，磧砂蔵本などには「浩浩皓皓昭昭明善」とある。『平等覚経』には「浩浩（v.l. 皓皓）浩浩照明善」（290c27），王日休校輯『大阿弥陀経』には「浩浩渺渺」（336b14）とあるが，確かに「照照」は「渺渺」（はるか）の誤写かもしれない。「明善」は辞書類に採られていない。

111）誰當能知信其者？獨佛自信知爾　「知信」（知り信じる）は辞書類に採られていない。「信知」（きちんと知る）は，例えば HD.1.1418b には杜甫の詩に見える例を挙げている。「當」は，「一体」「そもそも」の意味。訳注（一）注（25）を参照。なお『平等覚経』には「誰當能信知其者乎？獨佛自知耳」（290c28）とある。

112）巍巍　普通は高いさま，崇高なさまを示す。

113）快善　注（61）を参照。

114）乃獨如是　注（62）を参照。

115）盧樓亘　高麗蔵本にのみ「蓋樓亘」とあるが，金蔵本などにより改める。注（79）を参照。

116）總領道智，典主教授　後には摩訶那鉢菩薩に関して「典主智慧，總領教授」（309a21）とある。「總領」（HD.9.998b. 漢代）と「典主」（HD.2.113a. 三国志）は同義。ここではいずれも「掌握」（王日休校輯『大阿弥陀経』336b19）の意味。「道智」は注（12）を参照。

117）過度　訳注（一）注（36）を参照。

118）當復如大師阿彌陀佛　「當復」の「復」は二音節にするために加えられた接尾辞でそれ自体は意味がない。Cf. Zhu 149 ～ 150; Krsh (1998). 80.

数え切れないほどの劫の間留まって，偉大な師（阿弥陀仏）のした通りに行った後[119]，やっと完全な涅槃に入る。

その次に摩訶那鉢[120]菩薩が仏になる。智慧を把握し，教えることを把握して，（衆生を輪廻から）救済することの福徳は，偉大な師，阿弥陀仏と同じであるはずだ。無数劫のあいだ留まっても，やはり[121]完全な涅槃に入らず，次々と[122]（教えを）伝えてゆく。教え[123]はとても輝き，国土はとてもすばらしい。

（阿弥陀仏の）法は，このように断絶することなく，極まることがない。」

[124]阿難は膝立ちし合掌して仏に尋ねた。

「[125]阿弥陀仏国には須弥山はありませんが，（天界の下から）第一番目の四天王天と第二番目の忉利天[126]は何[127]に支えられて[128]いるのでしょうか。お聞かせ下さい。」

[129]仏は阿難に仰った。

「君は仏（わたし）に対して[130]疑念[131]を持つのか。[132]八方上下のはてしなく無量無数の諸世界にある大海の水を，一人の人がますで量ろうとするなら，まだ汲み尽くして（309b）底にある泥に至ることが出来るが，仏の智慧はそうはいかない。」

仏は仰った。

「私が見るところでは，過去の仏で，私と同じ釈迦文仏という名前の者は，ガンジス河の岸辺の砂の数ほどいる――砂の一粒が一人の（釈迦文）仏にあたる――。未来の仏で，私と同じ名前の者はガンジス河の岸辺の砂の数ほどいる。[133]将来，仏となろうという願いを持つ者で，私と同じ名前の者はガンジス河の岸辺の砂の数ほどいる。」

119）**准法**　辞書類に採られていない。「倣う」の意味。
120）**摩訶那鉢**　注（80）を参照。
121）**尚復**　GHX.491には『史記』などの例を挙げている。
122）**展轉相**　注（95）を参照。
123）**經道**　訳注（一）注（4），（19）を参照。
124）以下の部分，諸本との対照は，香川 1984: 202 ～ 203を参照。
125）**阿彌陀佛國中無有須彌山**　訳注（二）注（53）を参照。
126）**忉利天**　訳注（三）注（92）を参照。
127）**何等**　「なに」の意味。Cf. Krsh (1998). 176, Krsh (2001). 114.
128）**依因**　同義字を重ねた語。HD.1.1349aには『抱朴子』の例が挙げられている。
129）以下の仏智のすばらしさを説く部分は『平等覚経』にのみ対応がある。香川 1984: 203を参照。
130）**於佛所**　後にも（309b29）同じ表現が出る。「於～所」で「～に」を意味する。Cf. Krsh (2001). 434.
131）**疑意**　辞書類に採られていない表現。
132）**八方上下……得其底泥**　類似の例えが本経の別の箇所（301a4f.）に見える。訳注（一）注（21）を参照。

仏は正座して，まっすぐ南を向いて見た。

「南の方角の現在の仏で，私と同じ名前の者はガンジス河の岸辺の砂の数ほどいる。八方上下の過去・未来・現在の仏で，私と同じ名前の者は，それぞれガンジス河の岸辺の砂の数の十倍もいる――砂の一粒が一人の（釈迦文）仏にあたる――。（私と同じ名前の仏の）数はこれほどであるが，仏（わたし）はそれらを皆[134]予め見て分かっている。」

仏は仰った。

「（この娑婆世界では）過去無数劫以来，一劫，十劫，百劫，千劫，万劫，億劫，億万億劫のそれぞれの劫に仏がいた。（従って）過去仏たちは，一仏，十仏，百仏，千仏，万仏，億仏，億万億仏いるわけだが，それぞれ名前が異なっていて，私と同じ名前の者はいない。

（この娑婆世界の）[135]未来の劫，一劫，十劫，百劫，千劫，万劫，億劫，億万億劫のそれぞれの劫に仏がいるだろう。（従って）一仏，十仏，百仏，千仏，万仏，億仏，億万億仏いて，それぞれ名前が異なっているが，まれに[136]私と同じ名前の者が現れる。

八方上下の無数の仏国の現在仏だが――次に他方仏国に（関して言うのだが）――，一仏国，十仏国，百仏国，千仏国，万仏国，億仏国，億万億仏国に仏がいて，それぞれ名前があり，数多いが皆異なっていて，私と同じ名前の者はいない。（しかし）八方上下の無数の仏のうちに，まれに[137]私と同じ名前の者がいる。

八方上下・過去・未来・現在の間は，遙かに隔たり，悠遠と離れ，はるかに果てしない。しかし，仏の智慧は完璧に[138]はっきりしていて，古今を知り[139]，無窮の過去を知り，未来に関しても[140]まだ起きてないことを見，果てしなき（未来）を予知する。

133）甫始欲求作佛者　「甫始」は同義字を重ねた語。仏典では「将来～しようとする」あるいは「将来，未来」の意味のようだ（GHX.162 は魏代の文例を挙げているが，意味が異なる）。同じ支婁迦讖訳『道行般若経』に出る「甫當」（大正蔵第 8 巻，431c29, 447a8, 448c-2 など）「甫當來」（428a3, 433b25, 436b1 など）も「未来」の意味。後に「甫始當來劫」という表現が出るが（309b13），これも「未来劫」の意味。

134）皆悉　訳注（四）注（32）を参照。

135）甫始當來劫　注（133）を参照。

136）時時　Cf. Krsh (1998). 404; Krsh (2001). 241.

137）時時　前注を見よ。

138）亘然　Cf. Krsh (1998). 162.

139）探古知今　金蔵本は「採古知今」に作る（＝『平等覚経』の高麗蔵本・金蔵本）。

140）却　訳注（一）注（97）を参照。

全く計り知れず，[141] 全く数え切れないほどの数の仏の超人的な力と気高さ賢さ[142] を，（私は）すべて知っている。[143] 明晰さという点において仏の智慧はさとりの本質と等しい。仏の教え[144] を尋ねてそれを窮めつくす[145] ことの出来る者など決していない。仏の智慧は決して量りつくすことはできないのだ。」

[146] 阿難は仏の言葉を聞いて，大変おそれ，総毛[147] 立ち，仏に申し上げた。

「私が仏に対して[148]疑念[149]などもつはずがありません。仏にお尋ねした理由は，（次の通りです）。（阿弥陀仏国以外の）他の仏国には，みな（309c）須弥山があり，（天界の下から）第一番目の四天王天，第二番目の忉利天はいずれもそれに支えられています。（釈迦文）仏が完全な涅槃に入られた後，もし神々や人々，比丘，比丘尼，優婆塞，優婆夷が私の許へ来て，『阿弥陀仏国だけにはなぜ須弥山がないのですか。そこの第一番目の四天王天，第二番目の忉利天は何に支えられているのですか』と尋ねられたら，私はこれに答えねばなりません。今，仏にお尋ねしておかねば，仏がいらっしゃらなくなってから，どう答えればよいのでしょうか。仏だけがご存知です。他に私に説明できる人はいません。だから仏にお尋ねしたのです。」

[150] 仏は仰った。

「阿難よ，この（世界の）（天界の下から）第三番目の焔天[151]，第四番目の兜術天[152] から第七番目の梵天に至る諸天はみな何に支えられているのか。」

阿難は申し上げた。

「これら天はみな自然に空中に浮かんでいます。空中で浮かぶのに，何の支えもいりません。」

141）甚無央數　　注（100）を参照。
142）尊明　　HD.2.1283a には『潛夫論』の用例を挙げている。
143）佛智慧道徳合明　　『易・乾』「夫大人者，與天地合其徳，與日月合其明，與四時合其序，與鬼神合其吉凶」，『淮南子・泰族訓』「故大人者，與天地合徳，日月合明，鬼神合靈，與四時合信」を踏まえた表現（Cf. HD.3.149a）。後にも「阿彌陀佛國諸菩薩、阿羅漢衆等……能升入泥洹，長與道徳合明」（311c17），「今世爲善，後世生阿彌陀佛國，快樂甚無極，長與道徳合明」（313b12）という表現が出る。「道徳」はここでは「さとりの本質」「さとりそのもの」の意味であろう。訳注（二）注（70）を参照。
144）經道　　訳注（一）注（4），（19）を参照。
145）窮極　　HD.8.469a には『列子』に出る例を挙げている。
146）以下の阿難の言葉は，『平等覚経』以外に『無量寿経』に対応する文がある。すなわち「阿難白佛：“我不疑此法。但爲將来衆生，欲除其疑惑。故問斯義。”」（270a21f.）。
147）衣毛　　Cf. Krsh (1998). 533.
148）於佛所　　注（130）を参照。
149）疑意　　注（131）を参照。
150）以下の部分，梵本などにも対応する文がある。香川 1984: 202 ～ 203 を参照。
151）焔天　　「焔」は *Yāma* の音写語。支婁迦讖は『道行般若経』では「炎天」（439c1），「鹽天」（434c25）と訳している（「炎」「鹽」も音写）。羅什以降は「夜摩天」と訳された。
152）兜術天　　「兜術」は *Tuṣita* の音写語。

[153]（仏は仰った。）

「[154] 仏は大変すぐれた超人的な力をもち，自由自在思い通りに行動し，その行おうとする行動は（他の者には）予測ができない。これらの天でさえ，みな空中に浮かんでいる。まして，（阿弥陀）仏の超人的な力がすばらしく，（そうなるように）しようと思っているのだから，（四天王天と忉利天も空中に浮かんでいるのは）言うまでもない。」

[155] 阿難は，仏の言葉を聞いて，大変歓喜し，膝立ちし合掌して申し上げた。

「仏はその智慧で，八方上下の過去・未来・現在のことを窮まりなく果てしなく知っておられる。（その智慧は）すぐれていて，卓越し[156]，すばらしく，明るく美しく[157]，全く比べるものとてありません[158]。（その）超人的な力は優れていて，かなうものはいません。」

『阿弥陀経』巻上

略号表

注で使用した略号は次の通り：

BHS = Buddhist Hybrid Sanskrit

Coblin = W. South Coblin, *A Handbook of Eastern Han Sound Glosses*, Hong Kong 1983 (The Chinese University Press)

DK =諸橋轍次著『大漢和辞典』全 13 冊，東京 1955-60（大修館書店）.

GHX =『古代漢語虚詞詞典』中國社會科學院語言研究所古代漢語研究室編，北京 1999（商務印書館）.

HD =『漢語大詞典』，全 13 冊，上海，1986 ～ 1994（漢語大詞典出版社）.

Hu =胡敕瑞『《論衡》與東漢佛典詞語比較研究』，成都 2002（巴蜀書社）.

Krsh (1998) = *A Glossary of Dharmarakṣa's Translation of the Lotus Sutra* 正法華經詞典，Seishi Karashima, Tokyo 1998, The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica I).

153）『平等覚経』はここに「佛言：“無量清淨佛國無有須彌山者亦如是。第一四王天、第二忉利天皆自然在虚空中住止，無所依因也。” 佛言」（291c5f.）を挿入している。

154）**佛威神甚重，自然所欲作爲，意欲有所作爲，不豫計**　「自然所欲作爲」を『平等覚経』は「自在所欲作爲」に作る（291c8）。「自然」と「自在」はここでは同義（注［63］参照）。前に類似の表現が出た：「諸佛威神同等爾，自在意所欲作爲，不豫計」（302c28f.; 訳注［二］注［6］参照）;「在心所作，爲不可豫計」（307c8. 注［36］参照）。

155）以下の阿難の言葉は，『平等覚経』にのみ対応する文がある。

156）**妙絶**　HD.4.300b には南朝斉代の詩などの例が挙げられている。

157）**明好**　訳注（二）注（9），訳注（三）注（7）を参照。

158）**甚無比**　注（100）を参照。

Krsh (2001) = *A Glossary of Kumārajīva's Translation of the Lotus Sutra* 妙法蓮華經詞典, Seishi Karashima, Tokyo 2001, The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica IV).

Li =李維琦『佛經續釋詞』, 長沙 1999 (岳麓書社).

MC = Middle Chinese (表記方法は Coblin 1983: 41 に準拠する)

MW = Monier-Williams, M., *A Sanskrit-English Dictionary*, Oxford, 1899.

Pa = Pāli

Skt = Sanskrit

Sukh (F) = *The Larger Sukhāvatīvyūha: Romanized Text of the Sanskrit Manuscripts from Nepal*, ed. Kotatsu Fujita, Tokyo 1992-1996 (Sankibo Press), 3 vols.

Zhu =朱慶之『佛典與中古漢語詞彙研究』, 台北 1992 (文津出版社).

ZXYL =董志翹・蔡鏡浩『中古虚詞語法例釋』, 長春 1994 (吉林教育出版社).

香川 1984 =香川孝雄『無量壽經の諸本對照研究』, 京都 1984 (永田文昌堂).

香川 1993 =香川孝雄『浄土教の成立史的研究』, 東京 1993 (山喜房佛書林).

末木 1980 =末木文美士「『大阿弥陀経』をめぐって」,『印度学仏教学研究』第 29 巻第 1 号 (1980), pp. 255 ～ 260.

藤田 1970 =藤田宏達『原始浄土思想の研究』, 東京 1970 (岩波書店).

藤田 1975 =藤田宏達『梵文和訳・無量寿経・阿弥陀経』, 京都 1975 (法蔵館).

藤田 1994 =藤田宏達・桜部建『浄土仏教の思想』第一巻『無量寿経・阿弥陀経』, 東京 1994, 講談社, pp. 1 ～ 241「無量寿経」.

訳注 (一) =辛嶋静志「『大阿弥陀経』訳注 (一)」『佛教大学総合研究所紀要』第 6 号 (1999), pp. 135-150.

訳注 (二) =辛嶋静志「『大阿弥陀経』訳注 (2)」『佛教大学総合研究所紀要』第 7 号 (2000), pp. 95-104.

訳注 (三) =辛嶋静志「『大阿弥陀経』訳注 (三)」『佛教大学総合研究所紀要』第 8 号 (2001), pp. 133-146.

訳注 (四) =辛嶋静志「『大阿弥陀経』訳注 (四)」『佛教大学総合研究所紀要』第 10 号 (2003), pp. 27-34.

(平成十五年度日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(C)(2)による研究成果の一部)